

# 人々 尽く 光明の 在る 有り

私たちには古来から、旧い年の邪を除き払い、改めて新年や立春を迎えるという習慣があります。こうして迎えた年は汚れない年とも考えられますから、めでたいのです。

この時期にこそ、「光明」という言葉について考えてみるのも適切ではないかと思えます。

ある人が入ってきたら急に明るくなるとか、ある人に文句を言おうとして出かけて行ったが、その人に向かうと何も言えなくなってしまうた、という経験はないでしょうか。それはその人が、派手な服装をしているとか、威圧的な態度を取っていたとかではありません。また単なる雰囲気でもありません。その人の人格がそうさせるのでしよう。

仏教では、このようにその人そのものの内面からほとぼしり出るものを「光明」と呼んでいます。

「人々 尽く 光明の 在る 有り」（すべての人には光明が宿っている）という冒頭の句は、『碧巖録』にあります。この句を道元禅師は『正法眼蔵』の巻で「人々 尽有の 光明は 現成の人々なり」と著し、光明がことごとく人々を有らしめていると説いています。

私たちはこの光明に気づかないことが多いのです。他の光明にも己のそれにも。修行し、自他の光明を看取し得て、光明が光明となり自他が自他となるのだと思えます。

人々尽く  
光明の  
在る有り

曹 洞 宗

神奈川県第二宗務所  
第五教区 布教部・出版部

解説

光明こうみやうとは、仏・菩薩の智慧・慈悲ちえじひを象徴するものとしてよく用いられますが、道元どうげん禪師は、「正法眼蔵・光明こうみやう」において、光明とは螢光けいこうのように照らし照らされるものではなく、人それぞれが光明こうみやうであり、そのことを自覚し、日々精進しやうじんして生活してゆくことが大切であるとお示しめしに  
なられています。